

日本在住の日系ブラジル人に関する仮説の検証と解説 —感情の変化に着目して—

Hypotheses Verification and Interpretation of the Precedent Study about Nikkei Brazilians living in Japan —Focusing on the Change of Emotion—

前田 ひとみ
Hitomi MAEDA

Keywords : Nikkei Brazilians, foreign worker, positive minority, change of social status and emotion
キーワード : 日系ブラジル人、外国人労働者、ポジティブマイノリティ、社会的ステータスの
変化、感情の変化

はじめに

日本における外国人登録者数は2008年末の221万7,426人と過去最高記録を更新後¹⁾、その後4年連続で減少し、2012年末の在留外国人数²⁾は、203万8159人となり、我が国総人口1億2746万人に占める割合は1.6パーセントとなった。米国やヨーロッパ諸外国と比べ、日本における在留外国人の規模そのものは決して大きくない³⁾。しかしながら多くの学者が日本での移民の増加を指摘し、今後、移民受け入れは日本にとって「選択ではなく、必然」となるだろうとし (Curtin, 2003; Japan Times, 2004; Xinhua, 2003)、また今から14年前に書かれた山脇らの共同論文では、日本が現在の経済を維持し、少子化による労働力の低下を埋めるには外国人労働者の受け入れが必要であると既に警鐘を鳴らしていた (山脇, 近藤, 柏崎, 2000)。

そして今日、外国人労働者の実質的な受け入れ拡大に向け、自民党日本経済再生本部の労働力強化・生産性向上グループが3月末に提言をまとめた。震災復興に加え、2020年東京オリンピックに向けて建設現場の労働力不足が予想されることから、建設分野で実習を終えた外国人に在留資格を与え、建設労働に従事することを認めることの検討や、実質上の労働力として受け入れている「技能実習生」を一定条件の下、上限3年から5年に延長することや1企業が受け入れられる人数を増加すること、また受け入れ可能な職種の拡大などを柱とした (山本, 2014; 竹本, 2014)。

日本における在留外国人は1980年以降急速に増加し⁴⁾、当時日本はバブル絶頂期で多くの労働者が近隣諸国から来日した。1980年代の日本のGNPはフィリピンの30倍、バングラディ

ツシュの125倍であり、日本で1日に稼ぐ賃金はフィリピンの30日分、バングラディッシュの125日分に相当し、日本の高いGNPと発展途上国との賃金格差は多くの外国人労働者を日本の労働市場に惹き付けた (Machimura, 2000; Yamanaka, 1993; Lie, 2001)。Okano & Tsuchiya (1999) は「1980年代中盤以降、外国人労働者は経済的恩恵を得るため発展途上国から来日し、外国人労働者数の増加により現代の日本はかつてないほど多民族社会になった (p.128)」と述べた⁵⁾。また本論文で焦点を当てている日系ブラジル人は1990年の「出入国管理及び難民認定法」の改正以来、急激な増加を見せ、この法改正により東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県における日系ブラジル人居住者は1987年には1,000人だったが、10年後の1997年には71,000人に膨れ上がった (Machimura, 2000)。そして日本全体では1975年には1,418人だった国籍別 (ブラジル) 外国人登録者数⁶⁾ は、法改正直後の1990年には56,429人と急激な増加を示し (出入国管理統計年報)、2012年現在193,571人となっている (法務省, 2013)。日系人は単独だけでなく家族も伴って来日する傾向があり彼らの滞在傾向は単身での短期出稼ぎ型から家族を伴う長期滞在型へと変貌し、それに伴い諸問題の質の変化、外国人としての支援方法から地域住民としての支援へと地域社会のとらえ方も変化してきた。そこで本研究は、「日系」という他の在留外国人とは違うルーツを持つ日本在住の日系ブラジル人に焦点を当て、先行研究から得られた2つの仮説 (感情の変化に着目) を検証し、解説することを目的とする⁷⁾。

1. 背景

1. 1 日系ブラジル人の移住の概要：日本からブラジルへ、ブラジルから日本へ

日本からブラジルへの移住は1908年に笠戸丸で781人が移住したのが最初であった (在サンパウロ日本国総領事館, 2014)。当時ブラジルでは1888年の奴隷法廃止により (Tsuda, 2003)、コーヒー農場での人手不足が深刻であり1908年から1941年までに約20万人の日本人がブラジルに渡ったとされる (Lesser, 2003)。中でも東北地方からの移民が多く、主に家や土地を相続しない二男、三男が多かったといわれ、1908年から1924年までの間に約35,000人の日本人がサンパウロのコーヒー大農園に渡り、1925年には日本政府は国策としてブラジルに移民することを推奨し、この結果12万人の日本人が移住した (Gunde, 2004; Fukuoka Latina, 2002)。多くの日本人は短期間の出稼ぎとして、そしていずれは日本に帰ってくるという夢を持ってブラジルに旅立ったがブラジルでの生活環境は厳しく、米、コーヒー、綿花などの農作物は日本人移住者にある程度の安定をもたらしたものの、農作物への投資の支払いのため貯蓄ができず、故郷に錦を飾るという帰国の夢はなかなか叶わなかった。そのため大半の日本人移住者は、そのままブラジルに残り日本語や日本文化を持つ日本人たちとコミュニティを形成していき、その中で日本人らしさというものは保持されていくことになった (Yamanaka, 2000)。そして戦後のブラジルへの移住は1954年から1961年が最盛期とされ、1945年から

1993年までに53,657人が移住した⁸⁾ (在サンパウロ日本国総領事館, 2014)。

ブラジルから日本へのUターンは1980年代から始まった。1980年代のブラジルはというところハイパーインフレーションにより物価は1980年代前半から上昇し、1993年にはインフレ率が2000パーセントを超え、失業率の増加、経済庁長官の5度にわたる交代劇、国債の増加などで長期にわたる経済危機に直面していた (Tsuda, 2003; 青柳, 2014)。一方、日本の1980年代はバブル絶頂期を迎え好景気による人手不足が深刻で、近隣諸国から労働者を受け入れるなど早急な対策が必要とされていた。当時多くの工場が労働者不足を補うべく日本人労働者を雇用したが、日本の若者は3K (汚い・危険・きつい) と呼ばれる過酷な低賃金の仕事を敬遠し (Lie, 2001)、日本人労働者が働きたがらない建設現場や工場の職を外国人労働者が埋める事になった (Okano & Tsuchiya, 1999)。

ちなみに1980年代の調査によると製造業の77パーセントが日本人の雇用が難しいと回答し、それゆえ多くの企業が労働力を維持するため外国人労働者に頼らざるを得ないと回答した (Lie, 2001)。このように1980年代後半のバブル経済期に建設と製造業は国際的規模に拡大したことから特にこれら業界での労働力不足が外国人労働者の雇用につながっていった (Maher, 1998; Tsuda, 1999)。

しかしながら当時、日本政府は近隣諸国から外国人労働者を雇い入れることを言語的問題、文化的問題、そして外国人による犯罪の増加を恐れ、彼らが及ぼすであろう日本社会における悪影響を心配していたとされる (Gunde, 2004; Marsella & Ring, 2003; Douglass & Roberts, 2000)。そこで白羽の矢が立ったのが日系人であり、彼らは血統が同じであり、文化的にも似ているため好ましいと法的環境の整備が行われ、「出入国管理及び難民認定法」の改正法案が1989年12月8日に国会を通過し、翌1990年6月1日から施行された (Douglass & Roberts, 2000; 森, 1994)。この改正は日系人に対し、日本の労働市場で制限を受けることなく仕事をすることができ、日系二世と三世に更新可能な最高3年の滞在を許した。これによりラテンアメリカから20万人の日系人が来日し、その多くは日系二世、三世で1908年から1924年の間にブラジルに渡った人々 (初期移住者) の子孫であった (Douglass & Roberts, 2000)。来日の理由として、ほとんどの日系人は来日の理由を経済的理由と挙げているが、Sellek (1997) は、日系人は先祖の生まれた場所や自分のルーツを確認することも来日の理由だと述べている。

日本政府にとっては日本経済の労働力不足を解消するため、日系ブラジル人を受け入れることは血のつながらない外国人労働者よりも日本を理解し、日本の社会に適応してくれるだろうと最も優れた解決方法であると思われた。しかしながら日系ブラジル人がブラジルに定住した100年の間に、彼らの“日本人らしさ”というものは徐々に失われ、無意識の中でブラジルの文化に同化していったといえる。ブラジル社会では“日本人”としてのアイデンティティを強く保持していたが、来日後、日本社会では“本物の日本人と違う”ということに初めて気づき、彼らは実は“ブラジル人”に近いのではないかという新たな感覚を持つようになったと Tsuda (2003) は述べている。

1. 2 日系ブラジル人の社会的ステータスの変化

一般的には、社会におけるマイノリティというと、マジョリティグループによる偏見や差別に苦しみ、低い社会的身分が与えられ、そのため通常彼らは“ネガティブマイノリティ”と位置づけられる (Tsuda, 1998)。しかし日系ブラジル人はマイノリティでありながら、ブラジル社会で一般的ブラジル人よりも教育レベル及び経済的レベルが高く、社会的階級の高い“ポジティブマイノリティ”と位置づけられてきた。Lesser (2003) は、エリート層のブラジル人は、日系ブラジル人をヨーロッパ人と同等、もしくはそれ以上の階級に位置づけていたと述べ、Tsuda (2003) は、日系ブラジル人はブラジル社会で日本民族の優秀さを誇りにし、日本人としての強いアイデンティティを保持していたが、来日後、初めて自分が何者であるか、そして自分は“日本人”ではなく“ブラジル人”だと気づくと述べている。

一方、日本社会での彼らの社会的階級の低さは日系ブラジル人の移民の歴史に直結しており、またブラジルは後進国であるというマイナスイメージ、そして高学歴であっても日本の社会では地位の低い仕事に従事することが多く、ブラジル社会での“ポジティブマイノリティ”という社会的階級から、日本では“ネガティブマイノリティ”という社会的立場に大幅に転落したといえる (Tsuda, 2003)。このような社会的ステータスの変化や日本でのカルチャーショックは、他の在留外国人が来日後、決して体験しないであろうアイデンティティギャップへと変化していった。

2. 仮説の検証：感情の変化に着目して

先述したように日系ブラジル人は、ブラジル社会の中で一般的ブラジル人よりも教育レベル及び社会的ステータスが高く、マイノリティとはいえ“ポジティブマイノリティ”として位置づけられている。ブラジル社会の中で、日本人としての強いアイデンティティを保持していた日系ブラジル人は来日後、そのアイデンティティギャップに直面し、社会に適応していくプロセスは他の在留外国人とは異なることがしばしば指摘されてきた。本研究はこの視点に着目し、日系ブラジル人に関する多くの研究結果を残している Tsuda (2003) の先行研究から導かれた次の2つの仮説 (感情の変化) を検証した。

仮説1：来日前と来日後の日本に対する感情の変化 (ポジティブからネガティブへ)

Tsuda (2003) の先行研究で、指摘されていた説は「来日前、日本に対してポジティブな感情を持ち、来日後はネガティブな感情に変化する」というものであった。これはブラジル社会における日系人はポジティブマイノリティがゆえ、来日前は優れた社会的ステータスを誇り、日本人としてのアイデンティティを強く保持している為、日本に対してポジティブな感情を持つが、来日後はその社会的ステータスの転落から日本に対してネガティブな感情へと変化するというものだった。

仮説2：来日前と来日後のブラジルに対する感情の変化（ネガティブからポジティブへ）

仮説1に反転するかたちで指摘されていた第2の説は、「来日前、ブラジルに対してネガティブな感情を持ち、来日後はポジティブな感情に変化する」というものであった。

3. 研究方法

日系人の居住には集住という特徴があるため、地域によっては30パーセントから50パーセントが日系人という地域すら存在し、日常生活における外国人と日本人の摩擦も報告され、それらの大部分は両者の交流の希薄さやコミュニケーション方法の違い、文化の違いにより起こるものであるという（労働政策研究研修機構，2004）。そこで本研究では神奈川県厚木市と愛川町で「ケーススタディ」という研究手法を用い、日系ブラジル人に対し質問紙調査（80人から回収）を行った¹⁰⁾。神奈川県は中規模な日系ブラジル人コミュニティが存在し、日系ブラジル人の急速な増加がみられることからコミュニティにおける一般的な住民の生活や意識、感情の変化をより追求できるのではないかということで行くつかの候補から選んだ。また研究方法である「ケーススタディ」についてはMerriam（1998）とYin（2003）を参照し、Yin（2003）はケーススタディが効果的な場合として次の3つ挙げており本研究に最も適した方法と思われた。Yin（2003）が述べた効果的な3つの方法とは1）“どのように”や“なぜ”という質問が提示されている場合、2）研究者がその現象に対して何のコントロールも持たない場合、3）現代のリアルな現象に焦点を合わせる時だとし、そのどれもが本調査に当てはまった。

また質問紙¹¹⁾は、日本語とポルトガル語の二種類を用意し、日本語版質問紙は平仮名で著者が作成し、ポルトガル語版質問紙はネイティブブラジル人に翻訳を依頼した。その際、日本語とポルトガル語の言語のニュアンスの確認作業を行い、日本語とポルトガル語どちらの質問紙を使用しても差異が出ないように、バックトランスレーションを行った。またサンプリング方法は目的によってサンプリング人口層を見極める手法“purposive sampling”（Yin, 2003）を採用した。

（1）日系ブラジル人住民のプロフィール

日系ブラジル人の質問紙回答者の42.5パーセントは女性で、男性は57.5パーセント、年齢は18歳から69歳までの一世¹²⁾から四世だった（表1，表2，表3）。回答者の74パーセントが二世および三世で、平均来日時年齢は23歳と大半が10代から20代にかけて来日し（表4）、平均滞在年数は8年で、4年から10年の滞在者が40パーセントを占め、10年以上滞在している人も30パーセントを超えている（表5）。

表 1 性別

性別	人数 (%)
女性	34 (42.5%)
男性	46 (57.5%)
有効回答	80 (100%)

表 2 世代

世代	人数 (%)
一世	12 (15.0%)
二世	28 (35.0%)
三世	31 (38.8%)
四世	6 (7.5%)
有効回答	77 (96.3%)
無効回答	3 (3.8%)

表 3 年齢

年齢	人数 (%)
18-19	8 (10.0%)
20-29	29 (36.3%)
30-39	20 (25.0%)
40-49	12 (15.0%)
50-59	6 (7.5%)
60-69	4 (5.0%)
有効回答	79 (98.8%)
無効回答	1 (1.3%)

表 4 来日時年齢

年齢	人数 (%)
0-9	8 (10.0%)
10-19	23 (28.8%)
20-29	22 (27.5%)
30-39	10 (12.5%)
40-49	4 (5.0%)
50-59	4 (5.0%)
有効回答	71 (88.8%)
無効回答	9 (11.3%)

表 5 滞在年数

滞在年数	人数 (%)
1年未満	5 (6.3%)
1～3年	15 (18.8%)
4～10年	31 (38.8%)
10年以上	27 (33.8%)
有効回答	78 (97.5%)
無効回答	2 (2.5%)

4. 結果：仮説の検証と解説

仮説 1：来日前と来日後の日本に対する感情の変化（ポジティブからネガティブへ）

いくつかの先行研究で指摘されていた説¹³⁾は、日系ブラジル人は「来日前、日本に対してポジティブな感情を持ち、来日後はネガティブな感情に変化する」というものであった。これは、ブラジル社会における日系人はポジティブマイノリティがゆえ、日本人としてのアイデンティティをより意識し、強調しているというもので Tsuda (2003) は、次のように述べている。

ブラジル社会で“日本人”であり続けると言うことは、社会的経済的な高いステータスの保持だけでなく、経済大国日本と発展途上国ブラジルというポジティブなイメージギャップ、また両文化への文化的イメージの落差があり、ブラジル社会で“日本人”でいるということは多くの恩恵があったといえる。日系人にとって、日本人であるという民族的アイデンティティを保持するという事は、ネガティブイメージのあるブラジル社会から彼ら自身を切り離し、ポジティブイメージのある日本に帰属するという事であった (p.82)¹⁴⁾。

日本の高い経済力、世界的成功、高い技術を持つ日本製品、テクノロジーや産業の発達などの記事がメディアによってブラジルで報道され、日系ブラジル人は日本への郷愁やポジティブなイメージを膨らませていったとされる。しかし来日後、日系ブラジル人は厳しい社会的ステータスの変化を経験せねばならず、それにより日本に対するイメージは、ポジティブからネガティブに大幅に変化するとの説があった。この仮説を検証した。

表6は来日前と来日後での日本に対しての感情の変化をクロス-tabulation分析したものである ($p=0.008$)。日本への感情が来日にかかわらず変化しなかったと回答した日系ブラジル人は47人で、うち、35人は「ポジティブな感情を」維持し、10人は「とてもポジティブな感情」を維持し、2人は「ネガティブな感情」を維持していると回答した。

また来日後、日本に対して更にネガティブな感情になったと回答した日系ブラジル人は15人で、そのうち、来日前、日本に対して「ネガティブな感情」を持っていたが、来日後は「とてもネガティブな感情」に1ランク減少したと回答した日系ブラジル人は1人で、来日前は「ポジティブな感情」を持っていたが、来日後は「ネガティブな感情」に1ランク減少したと回答した日系ブラジル人は8人、そして来日前は「とてもポジティブな感情」を持っていたが、来日後は「ポジティブな感情」に1ランク減少したと回答したのは6人だった。

反対に来日後、18人の日系ブラジル人は日本に対してよりポジティブな感情になったと回答した。そのうち1人は来日前、日本に対して「とてもネガティブな感情」を持っていたが、来日後は「ポジティブな感情」に変化したと回答し、6人は来日前の「ネガティブな感情」から来日後は「ポジティブな感情」に変化したと回答した。また1人は来日前は「とてもネガティブな感情」を持っていたが、来日後は「とてもポジティブな感情」に大幅に変化したと回答し、3人は来日前の「ネガティブな感情」から来日後は「とてもポジティブな感情」に変化し、7人は来日前の「ポジティブな感情」から来日後は「とてもポジティブな感情」に変化したと回答した。

質問紙調査結果をまとめると、来日後も47人の日系ブラジル人は日本に対しての感情の変化はないと回答し、15人が来日後更にネガティブな感情に変化したと回答し、18人が来日後更にポジティブな感情に変化したと回答した(表6)。つまり多くの場合、来日前と来日後で日系ブラジル人の日本に対しての感情は変化せず、どちらかという到来日後更にポジティブな感情へと変化し、本結果はそれまでの仮説—「来日前、日本に対してポジティブな感情を持ち、来日後はネガティブな感情に変化する」—を覆す結果となった。

表6 日本に対する感情(来日前) x 日本に対する感情(来日後現在) $p=0.008$

Cross Tabulation		日本に対する感情(来日後現在)				合計
		とても ネガティブ	ネガ ティブ	ポジ ティブ	とても ポジティブ	
日本に対する 感情(来日前)	とてもネガティブ	0	0	1	1	2
	ネガティブ	1	2	6	3	12
	ポジティブ	0	8	35	7	50
	とてもポジティブ	0	0	6	10	16
合計		1	10	48	21	80

仮説2：来日前と来日後のブラジルに対する感情の変化（ネガティブからポジティブへ）

仮説1に反転するかたちで指摘されていた第2の説は、「来日前、ブラジルに対してネガティブな感情を持ち、来日後はポジティブな感情に変化する」というものであった（Gunde, 2004; Tsuda, 2003）。

表7は、来日前と来日後でのブラジルに対しての感情の変化をクロス-tabュレーション分析したものである（ $p=0.001$ ）。ブラジルへの感情が来日にかかわらず変化しなかったと回答した日系ブラジル人は52人で、内27人は、「ポジティブな感情」を維持し、25人は「とてもポジティブな感情」を維持していると回答した。

また来日後、ブラジルへの感情が更にネガティブになったと回答した日系ブラジル人は17人で、うち、1人はブラジルに対して「とてもポジティブな感情」から「ネガティブな感情」に2ランク減少し、7人は「ポジティブな感情」から「ネガティブな感情」に1ランク減少、9人は来日前の「とてもポジティブな感情」から、来日後は「ポジティブな感情」に1ランク減少したと回答した。

反対に来日後9人の日系ブラジル人は、ブラジルに対し、よりポジティブな感情を持つようになったと回答している。そのうち1人は来日前の「ネガティブな感情」から来日後の「ポジティブな感情」と1ランク増加し、2人は「ネガティブな感情」から「とてもポジティブな感情」へと2ランク増加、そして6人は「ポジティブな感情」から「とてもポジティブな感情」へと1ランク増加したと回答している。

つまり来日後、52人の日系ブラジル人はブラジルへの感情の変化はなかったと回答し、17人の日系ブラジル人は、ブラジルへの感情は更にネガティブになったとし、9人の日系ブラジル人は来日後ブラジルへの感情は更にポジティブになったと回答した。それゆえ、本結果は二つ目の仮説一「来日前、ブラジルに対してネガティブな感情を持ち、来日後はポジティブな感情に変化する」一も覆す結果となった。

これら2つの仮説に関し、寺田氏¹⁵⁾は聴き取り調査で、興味深いコメントをしてくれた。寺田氏は多くの日系ブラジル人が日本での暮らしにポジティブな感情を持つのは日本での政治経済的の安定と日本の生活やサポートシステムに満足をしているからと述べている。そしてブラジル在住時のブラジルの経済がどれほどの彼女自身の生活に影響を及ぼしたかを次のように語ってくれた。「ブラジルの経済はひどく、ハイパーインフレーションによる経済の悪化で、人々は給料をもらった瞬間に消費せねばならず、私自身もそうでした。でなければ翌週にはモノの値段が大幅に上がっているのです。来日後、日本の安定した社会を見て、ブラジルの社会に大きく幻滅していました。日本ではモノの値段が毎日変化することもなく、今週買っても来週買ってもよかったから。」寺田氏は日本に移住後、日本の優れた政治を見て、ブラジルの社会システムがどれほど崩壊しているのかを痛感し、ブラジルへの感情は「ネガティブ」になり日本への感情は「ポジティブ」になったと語った。

表7 ブラジルに対する感情（来日前）x ブラジルに対する感情（来日後現在） $p=0.001$

Cross Tabulation		ブラジルに対する感情（来日後現在）				合計
		とても ネガティブ	ネガティブ	ポジティブ	とても ポジティブ	
ブラジルに対する 感情（来日前）	とてもネガティブ	0	0	0	0	0
	ネガティブ	0	0	1	2	3
	ポジティブ	0	7	27	6	40
	とてもポジティブ	0	1	9	25	35
合計		0	8	37	33	78

以上、先行研究から得られた2つの仮説（感情の変化）に対して本研究は疑問を呈する結果となったが、今後はサンプル規模を拡大し再度検証する価値があるであろう。

また本稿の分析過程であらためて疑問を持ったことだが、ブラジルの社会に苦言を呈した寺田氏も含めブラジルに対する感情が来日前、来日後のどちらの時点でも「とてもネガティブ」と回答した日系ブラジル人は誰一人としておらず（そのためそこから派生する感情の移動はなく縦列横列共に0）、ここには彼ら日系ブラジル人の自国ブラジルに対する愛情というものを読み取れるのではないかと思う。これは質問紙調査全体をあらためて見たときに気が付いた二次的なものであったが、誰一人としてブラジルに対する感情として「とてもネガティブ」と回答した人はいないという事実は興味深い。この気づきは私の調査全体に対する以下の疑問へとつながっていく点で意味があったといえる。

5. 研究全体の再吟味

この調査を通して辿り着いた理解の一つに調査方法に対する私自身の疑問をあげたい。つまり、どれほど彼ら（被調査者）がブラジルの社会や政府に対して失望していたとしても、第三者である日本人調査者の「私」が質問紙調査や聞き取り調査を開始した時点で、彼らの自国を擁護する姿勢が無意識のうちに表面化し、調査者は本質的な部分の理解に辿り着かない可能性を指摘したい。そしてどれほど多くの文献を利用し、聞き取り調査項目や質問紙調査項目を綿密に作成したとしても、それらは調査者の枠組みで作成される性質のものであるという点、またほとんどの数量的分析は科学的な方法でありつつも、データの解釈段階に至った時点で調査者の主観的な判断が前面に出てくる可能性が否定できない点も指摘したい（また建前的な回答を排除できず、建前かどうかの判断も難しい）。同様に日本に対する感情に関して言えば、来日前来日後のどちらの時点でも「とてもネガティブ」と回答した日系ブラジル人はいないが、来日前に日本に対する感情は「ネガティブ」だったものが「とてもネガティブ」に変化したたり、来日前「とてもネガティブ」だったものが、来日後現在は「ポジティブ」や「とてもポジティブ」に変化したたり、このような数字上の変化に対して説明の術を持たず、あくまでその数

字の解釈は調査者の主観や可能性（または文献調査からの理由づけ）によるものであり、感情の変化・移動が数字上では見えてもそれが一体何を意味しているのか本質的な解釈には至っていないことを付け加えたい。そのため、今後は本研究で採用した聴き取り調査や質問紙調査だけでは「表面化しにくい部分」や被調査者自身が「意識していない部分」にも理解が及ぶように調査方法を見直す必要もあり、尚且つ質的・量的の両方の利点を兼ね揃えた個へのアプローチも考慮した調査方法を検討する必要があるだろう。

6. おわりに

他国への移住理由はさまざまで、自国の経済的不安定さ、環境災害、宗教弾圧などから逃れるために、もしくはより一層の幸福を求め国境を超える。本研究で着目した日本在住の日系ブラジル人は、日本とブラジルの経済的背景が移住の大きな要因となっており、100年以上前に農村部の日本人がより良い生活を求めて、日本からブラジルを目指し、そして1980年代のブラジル経済の悪化に伴い先祖の母国でもある日本を目指した。この時期、日本もバブル好景気により人手不足が叫ばれており、日本政府は労働力不足を補うために法的環境を整備し（「出入国管理及び難民認定法」の改正法案が1989年12月に国会を通過、1990年6月から施行）、血統が同じであり文化的にも似ている（であろうと思われた）日系人を優遇した。その結果1985年には1,995人だった国籍別（ブラジル）外国人登録者数は法改正直後の1990年には56,429人と急激な増加を見せ、翌1991年には119,333人、その5年後の1996年には20万人を超えた（出入国管理統計年報）。このように急激な外国人の流入が過去にもあり、そこから多くを学べたであろうが、Lie（2001）は米国と違い日本は移民で創られた国家ではないため外国人との共存は大きなチャレンジとなるだろうと指摘しており、政府が今年発表した外国人労働者の受け入れ拡大についても多くの課題や問題点が浮き彫りになることは想像に難くない。例えばクルートワークス研究所（2011）によると外国人労働者を受け入れた場合のリスクとして次の3つをあげている。1）「不法就労者問題」：これは在留期間や資格を超えて不法に滞在することへの懸念であり、2）「失業のおそれと社会的対立」：これは外国人労働者が日本人の労働者の職を奪っているという意識が日本人に芽生える事による社会的対立への懸念であり、3）「社会コストの負担」：これは仮に50万人の出稼ぎ労働者を受け入れた場合の社会的な負担の試算を出しており¹⁶⁾、社会的費用が膨らむことへの懸念をあげている。このように外国人労働者受け入れに関して懸念される問題もある一方で、外国人労働者受け入れを支持する意見も根強く、それは国内で労働力が確保できないなら国外から労働力を補う必要性和高い専門的知識を持つ外国人をより積極的に受け入れていく必要性などに言及している。

ちなみに日系ブラジル人の日本とブラジルの両国に対する経済的貢献度の高さは注目すべき事柄であり（Curtin, 2003; 山脇, 近藤, 柏崎, 2000）、日本在住の日系ブラジル人が、本国ブラジルの家族や親類に送金する額は年間20億米ドルとも言われ、それはブラジルの総輸出額の

6パーセントに匹敵し、ブラジル経済においても日系ブラジル人の果たす経済的役割は大きいことがうかがえる (Gunde, 2004)。

本論文は1990年以降急激に増加した日本在住の日系ブラジル人に焦点を当て、「日系」という他の在留外国人とは違うルーツをもつ彼らの来日前と来日後の感情の変化に着目し、先行研究から得られた2つの仮説（仮説1：日系ブラジル人は「来日前、日本に対しポジティブな感情を持ち、来日後はネガティブな感情に変化」し、仮説2：「来日前、ブラジルに対してネガティブな感情を持ち、来日後はポジティブな感情に変化する」）を検証した。結果、それら2つの仮説に対して本研究は疑問を呈する結果となり、今後はサンプル規模を拡大し再度検証する意義を見出した。

最後に国連経済社会局人口部の報告書「補充移民」の内容について触れておきたい。「補充移民－人口の減少・高齢化は救えるか」によると1995年の日本の生産年齢人口（15歳～64歳）を今後も維持していくには毎年60万人の外国人を受け入れていく必要があるとされており (Curtin, 2003; 山脇啓造研究室, 2012)、今後、日本は人口減少社会となるのを避けるべく何らかの方策を打ち出すのか、もしくは大幅な移民受け入れ拡大の舵を取り人口規模の維持を図るのか、日本人にとっても考えなければならない岐路に立たされているといえる。

【注】

- 1) 1975年、日本における外国人登録者数は751,842人で、総人口の0.6パーセントだったが、1991年の法改正後には、1,218,891人となり、総人口の0.98パーセントを占めた。1998年には1,512,116人となり総人口の1.20パーセントとなり、この年、外国人登録者数は、1975年の2倍になった (出入国管理統計年報)。
- 2) 法務省入国管理局は、外国人登録法に基づき外国人登録者数を作成してきたが、平成24年7月に出入国管理及び難民認定法等が改正されたことに伴い、在留外国人 (中長期在留者と特別永住者) を対象として統計を行うこととなった。中長期在留者とは3か月以下の短期滞在や外交や公用の在留資格がある人は除かれている (法務省, 2013)。本論文では在留外国人という呼称を使用している。
- 3) 米国の移民数は約5600万人で、米国総人口の20パーセントを占めている (U.S. Department of State, 2005)。1997年、総人口に占める移民は、スイスは約19パーセント、ドイツは9パーセント、イギリスは4.9パーセントと報告されている (Herwartz-Emden, 2003; 小崎, 2008)。
- 4) 1950年代と1960年代にも日本は急速な工業化と経済の近代化を経験したが、農村部からの労働力と新技術の導入により諸外国からの労働力に頼らずに済んだ。この時期、「金の卵」と呼ばれる中学を卒業したばかりの多数の若者が都会で就職し、日本経済はこのような労働源で急成長を遂げた。国際的にみると、1960年代まで日本は低賃金労働者の輸出国だったが、1970年代に外国人労働者の流入が日本人労働者の流出を超え、移民傾向が逆転した (Sugimoto, 2003; Maher, 1998)。
- 5) 次の原文を著者が要約した。“Contemporary Japan is a more multiethnic society than ever before with an increasing number of foreign workers having arrived since the mid-1980s (...) The ‘newcomers’ voluntarily came to Japan from third-world countries in pursuit of economic benefits unattainable in their homelands; the strong Japanese currency and the shortage of labor made Japan an attractive place (Okano & Tsuchiya, 1999, p. 128).”
- 6) ちなみに国籍別 (ペルー) 外国人登録者数は1975年には1,418人だったが、法改正後の1990年に

- は10,279人、翌1991年には26,281人と膨れ上がった（出入国管理統計年報）。
- 7) 本論文は多くの英語の文献を使用している。その理由として特に自然科学の研究では、英語が実質的な共通言語になっており、多くの場合、新しい結果の報告や発見などは英語の論文という形式でなされており、今何が研究されて何が世界的に発信されているのかを知るためにも英語の文献を使用した。今後は日本語で書かれた文献も多く使用し、言語使用の違いで論点や主張は変わるのかという視点も踏まえ研究していきたい。
 - 8) ちなみに1988年のサンパウロ人文科学研究所の日系人口サンプル調査によると移住者を含む日系人の総数は約160万人ともいわれ、「世代別の混血状況では2世が6パーセント、3世が42パーセント、4世が63パーセントとなっており混血傾向が益々強まっている」としている（在サンパウロ日本国総領事館, 2014）。
 - 9) ポジティブとは肯定的な感情で、ネガティブとは否定的な感情である。
 - 10) 本研究の中で日系ブラジル人8名にも聴き取り調査（ブラジルでの日系人としての生活、日本での暮らし、仕事の内容、ルーツや家族について、アイデンティティの変化など）を行ったが、本論文では2つの仮説に関連するコメントとして1名を引用している。
 - 11) 質問紙を作成するにあたり、Patten（2001）とDillman（2000）を参照した。質問紙には滞年数や来日時年齢等の個人情報を書く欄、5件法の質問（日本に対する感情、ブラジルに対する感情）を実施。
 - 12) 1908年から1941年までに約20万人の日本人がブラジルに渡り（Lesser, 2003）、戦後のブラジルへの移住は1945年から1993年までに53,657人が移住し（在サンパウロ日本国総領事館, 2014）、今回調査では1世が15パーセントを占めた。
 - 13) 例えばGunde（2004）もTsuda（2003）と同じ見方を示し、“Their views of Brazil, which may have been quite critical when they resided in Brazil, became quite positive when they resided in Japan.” と述べ、ブラジルに住んでいる時、日系ブラジル人のブラジルへの感情は批判的で、来日後はポジティブに変化するというものだった。
 - 14) 次の原文を著者が翻訳した。“Being ‘Japanese’ in Brazil has many advantages since it not only is associated with high socioeconomic status but also involves a positive contrast between First World (Japan) and Third World (Brazil) and between Japanese and Brazilian culture. For the nikkeijin, the maintenance of a ‘Japanese’ ethnic identity becomes a way of differentiating themselves from the negative aspects of Brazilianness while affiliating themselves with the contrasting positive aspects of Japaneseness (Tsuda, 2003, p. 82).”
 - 15) 日系ブラジル人8名に聴き取り調査を行ったうちの一人で、本論文では2つの仮説に関連するコメントとして1名（寺田氏、女性、44才、専業主婦、日系二世）を引用した。
 - 16) リクルートワークス研究所（2011）は1992年の労働省（現厚生労働省）の研究会が行った試算を紹介しており「50万人の出稼ぎ労働者を受け入れるという想定において“出稼ぎ期”外国人が支払う税金や保険料（社会的便益）は3,266億円、外国人が享受する国や地方公共団体のサービスと給付（社会的費用）は806億円」、外国人労働者が定住した場合の「社会的便益は3,166億円、社会的費用は6,530億円」と社会的費用が圧倒的に多くなり、そして「外国人労働者が家族を本国から呼び寄せたなら社会的費用はもっと大きくなるだろう」としている（p.4）。

【参考文献】

- 青柳俊久（2014）「ブラジル：高所得国に向けた再スタートの年となるかーブラジル・コストの削減がカギ」新興国マクロ経済WATCH http://www.jbic.go.jp/wp-content/uploads/reference_ja/2014/01/17409/201401_seriesMacro.pdf（2014/10/29）
- Curtin, S. (2003). The declining birthrate in Japan: Part four-immigration scenarios. Social Trends. Retrieved February 17, 2004, from <http://unpan1.un.org/intradoc/groups/public/documents/>

- apcity/unpan011033.pdf
- Dillman, D. A. (2000). *Mail and Internet surveys: The Tailored Design Method*. New York: John Wiley & Sons, Inc.
- Douglass, M., & Roberts, G. (2000). Japan in a global age of migration. In Douglass, M. & Roberts, G. (Eds.), *Japan and global migration* (pp. 3-37). London: Routledge.
- Fukuoka Latina. (2002). *History of exchange between the Latin world and Japan*. Retrieved November 15, 2004, from <http://www.fukuokalatina.com/uk/reader/brazil.html>
- Gunde, R. (2004, January 27). *Japanese Brazilian return migration and the making of Japan's newest immigrant minority*. Retrieved December 7, 2004, from <http://www.international.ucla.edu/article.asp?parentid=6996>
- Herwartz-Emden, L. (2003). Migrant families in Germany. In Adler, L. L. & Gielen, U. P. (Eds.), *Migration: Immigration and emigration in international perspectives* (pp. 165-182). Westport, Connecticut: Praeger Publishers.
- 法務省(2013)「平成24年末現在における在留外国人数について」 http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00030.html (2014/6/18)
- Japan Times. (2004, September 14). *Japan and the immigration issue*. Retrieved December 7, 2004, from <http://202.221.217.59/print/features/life2004/fl20040914zg.htm>
- 小崎敏男 (2008)「人口減少と外国人労働政策」http://www.pem.u-tokai.ac.jp/jfpe/2008/08_21kosaki.pdf (2014/6/25)
- Lesser, J. (2003). A short history of identity building and homemaking. In Lesser, J. (Ed.), *Searching for home abroad: Japanese Brazilians and transnationalism*. Durham: Duke University Press.
- Lie, J. (2001). *Multiethnic Japan*. Cambridge: Harvard University Press.
- Machimura, T. (2000). Local settlement patterns of foreign workers in Greater Tokyo. In Douglass, M. & Roberts, G. (Eds.), *Japan and global migration* (pp. 176-195). London: Routledge.
- Maher, J. (1998). *Linguistic minorities and education in Japan*. In E. Beauchamp (Ed.), *Education and schooling in Japan since 1945* (pp. 233-245). London: Garland Publishing, Inc.
- Marsella, A. J., & Ring, E. (2003). Human migration and immigration: An overview. In Adler, L. L. & Gielen, U. P. (Eds.), *Migration: Immigration and emigration in international perspectives* (pp. 3-22). Westport, Connecticut: Praeger Publishers.
- Merriam, S. B. (1998). *Qualitative research and case study applications in education*. San Francisco: Jossey-Bass.
- 森博美 (1994)「日系ブラジル人就業者の定住希望意識について」『日本統計研究所報 1月 (20)』法政大学日本統計研究所 https://www.hosei.ac.jp/toukei/shuppan/g_shoho20_hiromi-m.pdf (2014/10/30)
- Okano, K., & Tsuchiya, M. (1999). *Education in contemporary Japan: Inequality and diversity*. United Kingdom: Cambridge University Press.
- Patten, M.L. (2001). *Questionnaire research: A practical guide*. Los Angeles, CA: Pyrczak Publishing.
- リクルートワークス研究所 (2011)「外国人労働者問題」http://www.works-i.com/pdf/r_000224.pdf (2014/10/31)
- 労働政策研究研修機構 (2004)「第一章 総論あらたな局面を迎える外国人労働者問題」http://www.jil.go.jp/institute/reports/2004/documents/014_2.pdf (2014/7/22)
- Sellek, Y. (1997). Nikkeijin: The phenomenon of return migration. In Weiner, M. (Ed.), *Japan's minorities: The illusion of homogeneity* (pp. 178-210). London: Routledge.
- 出入国管理統計年報「国籍別外国人登録者数の推移 1975, 1980, 1985, 1990-2012」<http://winet.nwec.jp/toukei/save/xls/L100080.xls> (2014/6/25)
- Sugimoto, Y. (2003). *An introduction to Japanese society* (2 ed.). Cambridge: Cambridge University

- Press.
- 竹本能文 (2014) 「安倍政権、『外国人労働者』の拡大を検討」東洋経済オンライン, 2014年1月9日
<http://toyokeizai.net/articles/-/27967> (2014/6/18)
- Tsuda, T. (1998). The stigma of ethnic difference: The structure of prejudice and "discrimination" toward Japan's new immigrant minority. *Journal of Japanese Studies*, 24(2), 317-359.
- Tsuda, T. (1999). The permanence of "temporary" migration: The "structural embeddedness" of Japanese-Brazilian immigrant workers in Japan. *The Journal of Asian Studies*, 58(3), 687-722.
- Tsuda, T. (2003). *Strangers in the ethnic homeland*. NY: Columbia University Press.
- U.S. Department of State. (2005). *U.S. Census Bureau Reports 56 Million Immigrants and Children*. Retrieved March 21, 2006, from <http://usinfo.state.gov/scv/Archive/2005/Sep/06-225066.html>
- Xinhua, A. (2003, December 4). Aging Japan shuns immigrant workers. *Shanghai Star*. Retrieved December 7, 2004, from <http://app1.chinadaily.com.cn/star/2003/1204/fe22-2.htm>
- 山本知弘 (2014) 「外国人労働者の拡大提言 自民、技能実習を延長し5年に」朝日新聞 Digital, 2014年3月27日 <http://www.asahi.com/articles/ASG3V53XGG3VULFA01J.html> (2014/6/18)
- Yamanaka, K. (1993). New immigration policy and unskilled foreign workers in Japan. *Pacific Affairs*, 66(1), 72-90.
- Yamanaka, K. (2000). I will go home, but when? labor migration and circular diaspora formation by Japanese Brazilians in Japan. In Douglass, M. & Roberts, G. (Eds.), *Japan and global migration* (pp. 123-152). London: Routledge.
- 山脇啓造研究室 (2012) 「多文化共生社会の構想—人口減少」 http://intercultural.c.ooco.jp/index.php/vision/policy/population_decline (2014/8/10)
- 山脇啓造, 近藤敦, 柏崎千佳子 (2000) 「移民国家日本の条件」 <http://www.kisc.meiji.ac.jp/~yamawaki/etc/migration.pdf> (2014/7/22)
- Yin, R. K. (2003). *Case study research: Design and methods*. California: Sage Publications.
- 在サンパウロ日本国総領事館 (2014) 「移住の歴史の概要」 http://www.sp.br.emb-japan.go.jp/jp/comunidade/history_jp.htm (2014/10/30)

(平成26年11月26日受理)